

## F-12 山村における生活変動の世代比較的考察

### —— 東京都松原村北谷の場合 ——

お茶の水女大家政 湯沢雅彦

〔目的〕極度の辺地性のために前近代的生活様式を持続してきた対象地域（松原村北谷の奥地6部落）において、生活様式を変動せしめた時期はいつ下、契機は何だったのか。また、変化した生活内容の量と方向を、女性を通して世代別に〈事後的コホート分析〉により、実証的に把握することを目的とする。

〔方法〕昭和52年7・9月、のべ36名の調査員が現地に宿泊、20～62歳の有配偶・有子女性118名、63～84歳の老人男女82名、計200名に対し標準化した調査票による訪問面接調査を実施した。回収率93%、有効票、主婦114、女性老人42、男性老人29。ほか、各調査員当りケース・ヒストリー1通を採取。なお、村役場、農協、中学校等において、資料収集ならびに聴取調査。

〔結果〕①伝統産業たる薪炭・木材・養蚕は昭和30年代なかばに衰退し、30年代後半からは近隣都市への通勤賃労働が収入源となり、生活様式は急速に都市化した。②最奥の3部落についていえば、通勤にもっとも寄与したのは、昭和30年代の道路の改良と40年代の自家用車の普及である。生活を文化的ならしめたのは、35年の電気の導入である。主婦の労働力軽減にもっとも寄与したのは、39年から51年にわたる上水道の普及である。③20歳代を除く女性全体と、男性を含めた老人の大部分は現状を肯定し満足感が高いが、それは、異常に低かった過去の生活水準との対比、および欲求水準の低さに由来するところが大い。④20歳時の仕事・夫の仕事・妻の仕事・服装・家族意識等について、30代以下の世代と40代以上との世代とでは大きな差異がある。